

しろ
白いぼうし

あまん きみこ 作

「これはレモンの匂いですか。」

堀端で乗せたお客の紳士が、話しかけました。

「いいえ、夏みかんですよ。」

信号が赤なので、ブレーキをかけてから、運転手の松井さんは、ここにこして答えました。

今日は六月のはじめ。

夏がいきなり始まったような暑い日です。

松井さんもお客も、白いワイシャツの袖を腕までたくし上げていました。

「ほう、夏みかんでのは、こんなに匂うものですか。」

「もぎたてなのです。昨日、田舎のおふくろが、速達で送ってくれました。匂いまで私に届けたかったのでしょう。」

「ほう、ほう。」

「あまり嬉しかったので、一番大きいのを、この車に載せてきたのですよ。」

信号が青になると、たくさんの車がいつせいに走り出しました。

その大通りを曲がって、細い裏通りに入った所で、紳士は降りていきました。

アクセルを踏もうとしたとき、松井さんは、はっとしました。「おや、車道のあんなすぐそばに、小さな帽子が落ちているぞ。風がもう一吹きすれば、車がひいてしまうわい。」

緑が揺れている柳の下に、可愛い白い帽子がちょこんと置いてあります。

松井さんは車から出ました。

そして、帽子をつまみ上げたたん、ふわっと何かが飛び出しました。

「あれっ。」

紋白蝶です。慌てて帽子を振り回しました。そんな松井さんの目の前を、蝶はひらひら高く舞い上がると、並木の緑の向こうに見えなくなってしまいました。

「ははあ、わざわざここに置いたんだな。帽子の裏に、赤い刺繍糸で、小さく縫い取りがしてあります。」

「たけやまようちえん たけの たけお」

小さな帽子をつかんで、ため息をついている松井さんの横を、太ったお巡りさんが、じろじろ見なが

とお す
ら通り過ぎました。

「せっかくの獲物がいなくなっていたら、この子はどんなにかがっかりするだろう。」

ちよつとの間、肩をすぼめて突っ立っていた松井さんは、何を思いついたのか急いで車に戻りました。

運転席から取り出したのは、あの夏みかんです。まるで、暖かい日の光をそのまま染め付けたような見事な色でした。酸っぱい、いい匂いが、風であたりに広がりました。

松井さんは、その夏みかんに白い帽子をかぶせると、飛ばないように、石でつばを押さえました。

車に戻ると、おかっぱの可愛い女の子が、ちょこんと後ろのシートに座っています。

「道に迷ったの。行って行っても、四角い建物ばかりだもん。」

つか こえ
疲れたような声でした。

「ええと、どちらまで。」

「え。—ええ、あの、あのね、菜の花横丁ってあるかしら。」

「菜の花橋のことですね。」

エンジンをかけたとき、遠くから元気そうな男の子の声が近づいてきました。

「あの帽子の下さあ。お母ちゃん、本当だよ。本当の蝶々がいたんだもん。」

みずいろ あたら むしと おとこ こ
水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンをつけたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っ張ってきます。

ぼく ぼうし あ かあ お
「僕が、あの帽子を開けるよ。だから、お母ちゃんは、このあみで押さえてね。」

いし お
あれっ、石が置いてあらあ。」

きやくせき おんな こ うし の だ い
客席の女の子が、後ろから乗り出して、せかせかと言いました。

はや はや い
「早く、おじちゃん。早く行ってちょうだい。」

まつい あわ ふ やなぎ なみき うし なが
松井さんは慌ててアクセルを踏みました。柳の並木がみるみる後ろに流れていきます。